

研究目的

現代はまさにスポーツの時代と呼ばれるくらい競技スポーツを初めとして、様々の人々によって色々な形でスポーツが盛んに行われている。もちろんこの中には大学生も含まれており、学生がスポーツ活動を行う際に最も身近なものの一つとして部活動がある。学生は、部活動に参加することによって、身体的、精神的、社会的に様々な能力を身につけることができる。しかしながら、「なぜ部活動に参加しているのか」ということは人それぞれによって違いがみられるという報告がある。つまり、学生の参加動機は様々であり、参加動機が異なることによって、部活動に対する取り組み方にも違いがみられることが考えられる。

そこで本研究では、金沢大学運動部所属学生の部活動参加には、どのような動機が関与しているのかを因子構造の次元から明らかにし、主体の側の条件によって参加動機を比較するとともに、今後、金沢大学運動部において、指導・運営上の問題に対して何らかの示唆を与えることを目的とする。

I. 研究方法

A. 調査対象

金沢大学内の体育会に登録されている運動部員、1年生～4年生までの男女競技者とした（1年生：160人、2年生：136人、3年生：113人、4年生：50人）。回収率に関しては、算出を行った結果、82.02%であった。

B. 調査時期および調査方法

平成13年10月下旬～11月下旬に調査を行った。調査依頼・回収はすべて、各運動部の代表者（主将、主務）に連絡をとり、承諾を得たあと、当方から当運動部へ赴く方法で行った。

C. 調査内容

丹羽・村松らの研究および山本の研究を参考に、ホメオスタシス性動機、情緒的動機、活動性動機、感性動機、好奇動機、達成動機、親和動機、達成動機・親和動機以外の社会的動機、身体的動機、技能的動機、人格形成的動機、レクリエーション的動機、性的動機、回避動機、固執動機に関する項目を作成した。その後、予備調査をもとに加筆修正を行い、合計15カテゴリー66項目からなる質問項目を作成した。なお、参加動機の測定スケールには、5：そうである、4：どちらかというそうである、3：どちらともいえない、2：どちらかというそうでない、1：そうでない、の5段階評定を採用した。

D. 解析方法

参加動機に関する項目に対し、因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行い、固有値1.0以上の因子を解釈可能な因子として抽出した。因子の解釈と命名は、因子負荷量0.45以上の項目を考慮して行った。主体の側の条件によって参加動機を比較するために、因子得点を算出し、2つの平均間の有意差検定にはt-検定を、3つ以上の平均間の有意差検定には一元配置の分散分析によって差異の検証を行った。一元配置の分散分析によって、有意差のあった尺度には多重比較検定（Scheffe法）を行った。なお、本研究で用いた有意水準は全て5%とした。

II. 結果および考察

A. 参加動機の因子構造

66の項目に対して因子分析を行った結果、全分散の59.3%を説明する15因子を抽出した。15

因子を抽出した内、第 15 因子以外の 14 因子を解釈した。つまり、金沢大学運動部所属学生の部活動への参加動機として、寄与率の高い順に「回避」、「活動性」、「親和」、「探索」、「社会的承認」、「達成」、「勧誘」、「人格形成」、「健康的」、「経験的」、「動的美容」、「耐性」、「余暇活用」、「固執」の各動機が明らかになった。特に、「回避」動機が抽出された動機の中で寄与率が 7.3% と最も高かった。つまり他人への配慮や、やめることによって生じるトラブルを考えると、やめるにやめられないということが部活動参加を規定する主要な要因になっていることが考えられた。しかし、こうしたネガティブな要因以外にも、「活動性」動機や「親和」動機のようなポジティブな要因も多く認められた。つまり、スポーツ本来のもつ内在的価値や手段的な価値を部活動に求めていることが推察された。また、寄与率は低いものの、本研究独自の因子として「経験的」因子、「耐性」因子、「余暇活用」因子が明らかになった。つまり、「過去の経験を生かしたり、その経験を再び味わいたい」ということや「忍耐力を養成したい」ということや「日頃の余った時間を何かにあてたい」ということが、少なからず金沢大学生の部活動参加の動機として関与していることが推察された。

B. 各諸条件による参加動機の比較

1. 男女別の比較

男女別に比較した結果は、表 2-1 に示す通りである。「親和」動機において、最も顕著な差異が認められた ($p < 0.001$) ことから、女子は男子よりも「集団を通じての交友関係の維持・拡大」が部活動参加の動機に関与しており、女子は勝敗が重要とされる競技スポーツの中にも、他者との接触・関係を重要とすることが推察された。さらに、「社会的承認」動機の結果を合わせて解釈すると、男子は自己アピールとして他者を必要とし、女子は友好関係の維持・拡大として他者を必要とする傾向が推察された。

2. 正選手と補欠選手別の比較

正選手と補欠選手別に比較した結果は、表 2-2 に示す通りである。「回避」動機において最も顕著な差異が認められた ($p < 0.001$) ことから、補欠選手は正選手よりも「他人への配慮や、やめることによって生じるトラブルを考えると、やめるにやめられない」ということが部活動参加の重要な動機となっていることが考えられた。さらに「固執」動機の結果から、このようなネガティブな要因は正選手よりも補欠選手の方が重要とすることが推察された。一方、「活動性」動機の結果から、正選手は補欠選手よりも「活動することが好きで、スポーツをすると気持ちいい」ということが部活動参加の動機として関与しており、スポーツ本来のもつ内在的価値を重要としていることが考えられた。以上のことから、正選手はスポーツの内在的価値を運動部参加の重要な理由としているのに対し、補欠選手の場合には、そうした要因を部活動継続の重要な理由としていないことが推察された。補欠選手におけるこのような結果は、大きな問題であり、補欠選手の積極的な部活動参加の動機を究明することが重要であると考えられた。

表2-1. 性別にみた参加動機の比較

動機名	性別	標本数	平均値	t-検定
親和	男子	349	-0.10581	***
	女子	110	0.33571	
社会的承認	男子	349	0.09535	**
	女子	110	-0.30253	
人格形成	男子	349	0.06419	*
	女子	110	-0.20367	
経験的	男子	349	0.08526	**
	女子	110	-0.27049	
動的美容	男子	349	-0.06497	*
	女子	110	0.20612	
固執	男子	349	-0.08934	**
	女子	110	0.28344	

表2-2. 正選手と補欠選手別にみた参加動機の比較

動機名	正選手ar補欠選手	標本数	平均値	t-検定
回避	正選手	224	-0.12938	***
	補欠選手	121	0.27258	
活動性	正選手	224	0.14634	*
	補欠選手	121	-0.12035	
探索	正選手	224	-0.15909	**
	補欠選手	121	0.18795	
人格形成	正選手	224	-0.05399	*
	補欠選手	121	0.19282	
固執	正選手	224	-0.04710	*
	補欠選手	121	0.15803	

*(p<0.05)

***(p<0.001)

*** (p<0.0001)

*($p < 0.05$)

**($p < 0.01$)

***($p < 0.001$)

3. 個人型種目と集団型種目別の比較

個人型種目と集団型種目別に比較した結果は、表 2-3 に示す通りである。「回避」、「社会的承認」の各動機の結果から、集団型種目の選手は個人型種目の選手よりも「他人への配慮や、やめることによって生じるトラブルを考えると、やめるにやめられない」ことや、「他者に認められたい」ということが部活動参加の動機に関与していることが考えられた。個人型種目の選手よりも集団型種目の選手のほうが他者との接触が多いことを考慮すると、集団型種目の特性があらわれた結果となったのではないかと推察された。

4. 武道部員別とその他の運動部員別の比較

武道部員とその他の運動部員別に比較した結果は、表 2-4 に示す通りである。「人格形成」動機の結果および武道部員の意識に関する研究から、武道部員は部活動の目的として、人格形成を重要としていることが推察された。また、武道の多くは動作の美しさが求められ、「動的美容」動機において有意差が認められたのは、武道の特性があらわれた結果となった。以上のことから、武道部員を特徴づける参加動機として、「人格形成」、「動的美容」の各動機は重要であることが推察された。

表2-3. 個人種目と集団種目別にみた参加動機の比較

動機名	種目のタイプ	標本数	平均値	t-検定
回避	個人	257	-0.07898	*
	集団	202	0.10049	
活動性	個人	257	-0.10391	**
	集団	202	0.13220	
社会的承認	個人	257	-0.11108	**
	集団	202	0.14132	
人格形成	個人	257	-0.01199	*
	集団	202	0.01526	
経験的	個人	257	-0.09722	**
	集団	202	0.12369	
動的美容	個人	257	0.15023	***
	集団	202	-0.19113	
余暇活用	個人	257	0.10392	**
	集団	202	-0.13221	

表2-4. 武道部員とその他の運動部員別にみた参加動機の比較

動機名	種目のタイプ	標本数	平均値	t-検定
回避	武道	77	0.28853	*
	その他	382	-0.05372	
達成	武道	77	0.33139	**
	その他	382	-0.06680	
人格形成	武道	77	0.21063	*
	その他	382	-0.04246	
経験的	武道	77	-0.20047	*
	その他	382	0.04041	
動的美容	武道	77	0.02188	*
	その他	382	-0.04406	
余暇活用	武道	77	0.21013	*
	その他	382	-0.04236	

5. 競技成績別の比較

競技成績別に比較した結果は、表 2-5 に示す通りである。「活動性」動機の結果から、競技成績の高い選手は低い選手よりも、スポーツの内在的価値を重要とすることが考えられた。一方、「動的美容」動機の結果から、競技成績が低い選手は高い選手よりも「動作や姿勢の美しさ」を部活動に求めていることが考えられた。この「動的美容」動機は、スポーツの手段的な価値であり、競技成績が低い選手は高い選手よりもスポーツの手段的な価値を部活動に求めているのではないかと推察された。

6. 経験年数別の比較

経験年数別に比較した結果は、表 2-6 に示す通りである。「活動性」動機の結果から、経験を経るにつれて「活動性」動機は強くなることが考えられた。また、「経験的」動機と「探索」動機は全く正反対の結果となった。つまり、経験年数の多い選手は、「今までの経験を生かしたり、その経験を再び味わいたい」ということが重要であり、経験年数の少ない選手は、新しいものの未知なるものへの期待などの欲求が高いことが考えられた。また、経験年数の少ない選手は多い選手よりも「社会的承認」、「固執」の各動機の重要とすることが示唆された。以上の結果を合わせて解釈すると、経験を経るにつれて、「探索」動機は「経験的」動機に移行し、「社会的承認」、「固執」といった動機は「活動性」動機に移行していくのではないかと推察された。

動機名	競技成績	標本数	平均値	t-検定
活動性	全国レベル	108	0.15745	**
	県レベル	74	-0.25758	
動的美容	全国レベル	108	-0.05714	*
	県レベル	74	0.22267	

動機名	F値	多重比較検定
活動性	8.47*	A<B, C
探索	131.037*	A>B, C
社会的承認	5.333*	A>B
経験的	22.891*	A<B, C
固執	3.609*	A>B

A: 経験年数0～3.9年

B: 4～9.9年

C: 10年以上

7. 学年別の比較

学年別に比較した結果は、表2-7に示す通りである。「探索」動機の結果から、4年生は経験年数の多い選手で構成されていることが推測され、少なくとも4年間部活動を行っており、「探索」動機が解消された結果ではないかと推察された。また、「社会的承認」動機の結果から、3年生中心となっている部活動が多く、最後の年で「他者に認められたい」という気持ちが強くあらわれた結果ではないかと推察された。

8. スポーツ継続の有無別の比較

スポーツ継続の意図の有無別に比較した結果は、表2-8に示す通りである。「回避」動機において最も顕著な差異が認められたことから($p < 0.001$)、「スポーツ継続の意図を持たない群」は、「他人への配慮や、やめることによって生じるトラブルを考えると、やめるにやめられない」ということが部活動参加の重要な動機となっていることが考えられた。一方、「活動性」、「健康的」、「経験的」の各動機の結果から、「スポーツ継続の意図を持つ群」は「スポーツ継続の意図を持たない群」よりも、「スポーツ本来のもつ内在的価値」や「健康や体力の維持・増進」や「スポーツの経験」を重視していることが推察された。以上のことから「スポーツ継続の意図を持つ群」は、スポーツの持つ内在的価値やその他スポーツにまつわる二次的な価値を重視しているのに対し、「スポーツ継続の意図を持たない群」は、やめるにやめられないということを運動部参加の主要な理由としている。しかしながら、「スポーツ継続の意図を持つ群」の積極的な部活動参加の動機は明らかではなく、より詳しい研究が必要であると考えられた。

動機名	F値	多重比較検定
探索	8.788*	4年<1年, 2年, 3年
社会的承認	3.438*	1年<3年

*($p < 0.05$)

**($p < 0.01$)

***($p < 0.001$)

動機名	継続の意図	標本数	平均値	t-検定
回避	あり	129	-0.45419	***
	なし	53	0.74772	
活動性	あり	129	0.17874	*
	なし	53	-0.22508	
健康的	あり	129	0.14686	*
	なし	53	-0.21344	
経験的	あり	129	0.30860	***
	なし	53	-0.41943	

III. 結論

- A. 金沢大学運動部所属学生の部活動への参加動機として、「回避」、「活動性」、「親和」、「探索」、「社会的承認」、「達成」、「勧誘」、「人格形成」、「健康的」、「経験的」、「動的美容」、「耐性」、「余暇活用」、「固執」の各動機が明らかになり、特に「回避」動機が最も重要であった。
- B. 主体の側の条件によって参加動機を比較した結果、それぞれを特徴付ける参加動機が明らかになった。つまり、女子は「親和」動機、補欠選手は「回避」動機、正選手は「活動性」動機、集団型種目の選手は「回避」、「社会的承認」の各動機、武道部員は「人格形成」、「動的美容」の各動機、「スポーツ継続の意図を持たない群」は「回避」動機である。また、経験を経るにつれて「活動性」動機が強くなることが示唆された。